

特集
モノからみる
海の暮らし

モノが語る島世界とヒト 小野 林太郎
カヌーはヒト、ヒトはカヌー 宮澤 京子
漁具—海のアートを探る 秋道 智彌
貝製品が語る沖縄先史人と海 藤田 祐樹



インドネシアでのカヌー作り

関野 吉晴

カヌーを作り、日本まで航海したいと思った。石器を作り、それで木を切り、カヌーを作ろうと思った。しかし、およそ五〇〇キロメートルの航海は不安だったので、鉄の工具を使うことにしたが、太古の人たちのモノ作りのコンセプト・手法「自然から素材を集めて、自分で作る」にしたがおうと思った。砂鉄を集め、炭を焼き、たたら製鉄で鋼を作り、それを鍛えて斧、ナタ、手斧、ノミを作りインドネシアに向かった。

スラウエシ島のマンダール人の船大工二隻のカヌーを作った。一隻は丸木舟、一隻はマンダール伝統の構造船バクルだ。彼らも今ではチェンソー、電動丸鋸、電動カヌーを使っている。戸惑いながらのカヌー作りだった。驚いたのは、作業の工程に「祈り」が詰まっていたことだった。まず、供物の前でイスラームの祈りを捧げ、その後に、棟梁がこれから切る木の幹に手を置いて、なにやらブツブツ唱えている。その木に宿る精霊たちに、木を切ることで他の木に移るようをお願いしたのだという。矢倉を組み、高さ三メートルの所で切った。高さ五四メートル・直径二メートル近い大木だった。設計図はない。倒れた木を見ながら、私が棟梁にどんなカヌーを作りたいか説明する。棟梁は倒れた大木に私が語ったカヌーのイメージを投影する。その後、ほとんど線を引くことなく、投影したカヌーのイメージを掘り出すように削り始めた。

カヌーのカタチになったところまでが船大工の山の仕事で、その後荒削りのカヌーを海岸に運んでカヌーの厚みを薄くし、マスト、甲板、舵、帆、アウトリガー（安定性を与えるための浮き）をつけていく。帆には、原し機を用いてヤシの葉から薄くて軽いカロロという布を織り、それを使った。ロープはヤシ科の植物の繊維から強靱で水濡れにも強いものを作った。塗料は隆起サンゴから作った。サンゴを焼き、水をかけると触れないほど熱くなり、ボロボロと崩れて粉になる。生石灰が消石灰になるのだ。これを白に入れ、ココヤシの実を煮て作った油を加え、杵でつくると漆喰ができる。船大工はアウトリガーは作らない。乗組員が作り取りつける。力を合わせて作ることによって、一体感をもて、ということのようだ。完成までに何回も供物を捧げ、祈る。完成間近に船底に直径二センチメートルほどの穴を空ける。彼らの家とカヌーには人体と同じで臍がある。わざわざ穴を空けて木柱で塞ぐのだ。家にも臍に当たる柱がある。カヌーの臍を削ってできた木屑を棟梁の家と船主（私）の家の臍に当たる柱にくくりつける。安全祈願のためだ。こうして作った二隻のカヌーで、スラウエシ島から右垣島まで四七〇キロメートルを航海した。太古の人たちと同じように、GPSやコンパスを使わず、星と鳥影を頼りに航海した。風任せ、潮任せの航海で三年間も要した。しかし自然と一体になれたいい航海だった。

プロフィール

1949年東京都生まれ。1971年、アマゾン川全流を下る。その後20年間南米への旅を重ねる。1993～2002年には、アフリカから南米最南端までの人類拡散の行程を、自らの脚力と腕力だけをたよりに進行する旅「グレートジャーニー」を敢行。2004～2011年には海を渡り日本列島にやって来た人びとの足跡を追う旅をおこなう。武蔵野美術大学名誉教授（文化人類学）。

目次

- 1 エッセイ 千字文
インドネシアでのカヌー作り
関野 吉晴

特集

モノからみる海の暮らし

- 2 モノが語る島世界とヒト
小野 林太郎
- 4 カヌーはヒト、ヒトはカヌー
宮澤 京子
- 6 漁具——海のアートを探る
秋道 智彌
- 8 貝製品が語る沖縄先史人と海
藤田 祐樹

- 10 みんぱく回遊
乳を攪拌してバターを作る
南 真木人
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド
大絵馬を修復する
日高 真吾
- 16 コレクションあれこれ
物語世界のキャラクター
——東南アジア影絵・人形コレクション
福岡 正太
- 18 シネ倶楽部 M
幸せの国のディストピア、
北欧から望むユートピア・トーキョー
——「HARAJUKU」
宮前 知佐子
- 20 ことばの迷い道
おフランス語とわたし
松本 文子
- 21 編集後記・次号の予告

表紙

レバ舟の木彫とサマの子ども
(撮影：門田修、フィリピン、スールー海、1984年)

特集 モノからみる海の暮らし

海と生きる人びとの暮らしを、舟や漁具といったモノから見つめる企画展「海のくらしアート展」。本特集ではそれと連動し、島世界に不可欠な道具がどのように使われているかを紹介する。はるかむかしから培われてきた技と創意工夫のなかに、人びとの美への思いが感じられるだろう。



企画展
「海のくらしアート展——モノからみる東南アジアとオセアニア」
会期：2022年9月8日(木)～12月13日(火)
場所：本館企画展示場

貝製の腕輪と胸飾りを交換するクラ交易のカヌー(撮影：門田修、バブアニューギニア、トロブリアンド諸島、2011年)

モノが語る 島世界とヒト

小野 林太郎

民博 学術資源研究開発センター

東南アジアやオセアニアの島世界では、海と密接にかかわりながら暮らす「海の民」ともよべる人びとが生活してきた。彼らが暮らしのなかで使ってきたモノには、人類が海に適應するプロセスのなかで生み出したさまざまな工夫や知恵、そして美しさが見え隠れしている。

海の暮らしと舟・カヌー

海の暮らしに欠かせない二大アイテムは、何といっても舟と漁具であろう。オセアニアでは舟はカヌーとして知られる。特にカヌー本体に平行して一本の浮き木が装着されるシングル・アウトリガーカヌーが主流だ。本館にあるチェメニ二号で知られるように、ミクロネシアのカロリン諸島では、今でもアウトリガーカヌーを使い、荒波を越えて長距離航海をする人びとがいる。

さらにポリネシア圏では、アウトリガー部分もカヌーにしてしまったダブルカヌーが知られめられた人びとの知恵や美的センスを感じることができよう。

漁具のなかでも美しいプロポーションを誇るのが釣り針だ。オセアニアでは近年まで貝や骨を素材にした釣り針が利用されてきた。真珠母貝など太陽の光を反射してキラキラと輝く素材が重宝され、疑似餌としての効果もあった。驚いたことに、貝製釣り針は旧石器時代の段階ですでに誕生していたことが近年の考古調査で明らかになってきた。東南アジアや日本の琉球列島では、二万年ごろにさかのぼる世界最古級の貝製釣り針が見つかっている。東南アジアではこれらの一部が副葬品としても利用されており、釣り針が漁具としてだけでなく、装飾品としても認識されていたことを示している。たしかにキラキラと輝く円形のプロポーションは、現代人の目にも美しく映る。そうした日常的なモノの美も、やはりアートとしてとらえられるのではないだろうか。



ポリネシア・サモア諸島のダブルカヌー模型(撮影：藤原一徳、H0137714)

てきた。人類史的には、このダブルカヌーの登場が、ハワイやイースター島といった四〇〇〇キロ以上の無寄港航海が求められる島じまへの移住を可能にしたとされている。そのフォルムは、ある意味でカヌーの完成形であり、美しさと強さを兼ね備えているように思う。ただ残念なことに、ダブルカヌーの伝統は途絶えてしまい、現在では模型などからありし日の姿を想像するしかない。

一方、東南アジアでは浮き木が両舷に装着されるダブル・アウトリガーカヌーが主流となる。島の数が多く、より隣接している島嶼部では、安定性の高いこのタイプが好まれたようだ。考古・言語学的には四〇〇〇年前ごろの新石器時代に、台湾や中国南部を起源とするオーストロネシア諸語を話す人びとが、東南アジア島嶼部を経てオセアニアの島じまへの移住に成功した

ことが明らかになりつつある。その際に利用されたのが、こうしたアウトリガーカヌーだったのではないだろうか。

海との生活で不可欠な舟やカヌーは、「生と死」の象徴でもあった。東南アジアでレパとよばれる家舟を住まいとしてきたサマの人びとは、レパに美しい彫刻を施し愛用した(表紙写真)。メラネシアのトロブリアンド諸島では、有名なクラ交易に利用されるカヌーに色調が印象的な装飾板が装着される。一方、霊船や船棺葬の伝統のなかでは、舟は死者をあの世界へと運ぶ道具としても重要な役割を担ってきた。

漁具にみる人びとの知恵

海での暮らしに欠かせないもうひとつのアイテムが漁具である。東南アジアやオセアニアの島じまでは、先史時代からじつに多様な漁具が作られ、利用されてきた。現在においても他地域にはないユニークな漁具や漁法が多い。これらはいずれも、その捕獲対象となる海の生き物の生態や行動を人びとが観察し、創意工夫することで生まれた。ゆえに漁具の形や機能は、実際にそれらがどのように使われ、どんな生き物を捕獲するためのものなのかを知らないとなかなか理解できない。逆にそれらが有機的に繋がったとき、それぞれの漁具に込



ミクロネシアのシングル・アウトリガーカヌー「チェチェメニ号」(本館オセアニア展示、H0004975)



企画展でも展示中のマーシャル諸島(上、K0000599)とニュージーランドの釣り針(下、撮影：藤原一徳、H0139308)



沖縄のサキタリ洞遺跡で見つかった2万3000年前の貝製釣り針(提供：沖縄県立博物館・美術館)

カヌーはヒト、ヒトはカヌー

宮澤 京子 みやざわ きょうこ
海工房ビデオグラフィアー

「カヌーは俺たちのライフジャケット。カヌーがあれば生きられる」。海の怖さを知る冗談好きの男たちが真顔で言う。伝統的なカヌーの建造法と航海術を今に受け継ぐミクロネシア連邦ポロワット環礁の男たちだ。そのカヌーは民博の花形収蔵品、チェチエメ二号と同型で、アウトリガーが船体の片側だけにあるシングル・アウトリガーカヌーだ。大きな三角帆で帆走する船外機付きFRPボートが便利に使われる現在も、カヌーは島の文化の根幹で、外洋での漁や二〇〇キロほど離れた無人島でのアオウミガメ獲りも、カヌーで行くと決めれば躊躇しない。

わたしが滞在したポロワット環礁は五つのサンゴ島からなり、ラグーンは日々小型のカヌーで賑わう。朝、薪を積んだ女性のカヌーが静かな水面を漕ぎ進む。その後をお手伝いの子どものカヌーが続く。スコールが来ると、少年たちは待つてましたとばかりにカヌーに跳び乗り、小さな帆を立てて嵐のなかの航海ごっこだ。そんなラグーンで、伝統カヌーを受け継ぐ海の男たちが育まれる。

ココヤシ繊維のロープ

彼らが信頼を寄せる外洋航海用の帆走カヌー



ココヤシ繊維のロープで固縛した外洋航海用カヌーのアウトリガー (2012年)



発酵したパンノキの実マールが蒸しあがった (2012年)

は、ココヤシの繊維をよつた手作りのロープで縛りつながられている。パンノキの幹から削り出した船底、舷側板、船縁、船首・船尾は、うがつた穴にロープをとおして縫うように張り合わせる。アウトリガーは、腕木と浮き木のあいだに支柱をかませ、固く縛りあげる。帆布と帆桁、舵と把手をつなぐのも、帆の角度を調整する綱も、ココヤシロープだ。帆柱は固定されておらず、このロープで支えているだけ。大丈夫かと不安になるが、ココヤシロープは海水に強く丈夫で、巧みに固縛された各々の部位は、かかった力を吸収し柔軟にしなる強さをもつ。どこかが壊れても縛り直せばいい。大中小と太さの異なるロープを、固く

2本の帆桁を寄せて帆を締め強風下を走る(2013年)



船も航海もできないココヤシロープは、海洋ゴミにもならない古くて新しいロープでもある。

パンノキとカヌー

身軽な若者が樹高三〇メートル近い木に登り、棒で実を引っかけ地面に落とす。島の主食のひとつ、パンノキの実の収穫だ。先端が鉤のようになった実採り棒は、長さが三メートル以上ある。伝統航海術に習熟した航海士は、この棒で目的の島を引っかけるところをイメージする。大事な生活道具の棒が、目的地の方角を推し測るメタファーとして使われるのだ。

実の一部は、地中やプラスチック容器に貯蔵し発酵させる。発酵してペースト状になったものは、パンノキの葉に包んで蒸すと日もちがし、航海に欠かせない携行食になる。これを作るのは女性の仕事だ。

パンノキの収穫と携行食。男女はそれぞれの仕事で助け合う。そして、カヌーの上でも「男と女」が助け合うという。三角帆の縦の帆桁(男)と横の帆桁(女)だ。しかと結ばれたふたつの帆桁は、風の強弱に応じて角度が調整され、風を最適、最大限に取り入れる帆の形を作る。

パンノキの携行食を積み、ポロワット環礁からグアム島へ出航する前夜。「カヌーは俺たちの墓場。オジが行くならついて行き、一緒に死んでもかまわない」。わたしが同乗する機会を得たカヌーの男たちは、そうつぶやいてヤシ酒をしたま飲んだ。これが最後の酒宴になるかも、と。あれ、カヌーはライフジャケットのよ

うに安心だと言っていたのに？ 海という自然に向き合うとき、生と死と、あらゆることを覚悟するのだろう。彼らが誇るカヌーでの八〇〇キロの航海は、波が船体をたたく音、風が帆をたたく音、ロープがしなり軋む音の協奏曲。男たちは全身で風と海のうねりに反応し、帆綱を操り、舵をとり、自らの体重を重しにしてカヌーのバランスをとる船上の即興ダンスだ。カヌーは単なるモノにあらず。カヌーはともに生きる家族で、そこには海に生活を求める男たちの知恵と技、プライドが凝縮されている。

ラグーンで追い込み漁をする若者たちと手漕ぎのカヌー (2012年)



漁具——海のアートを探る

秋道 智彌 あきみち ともや
民博名誉教授



東南アジア島嶼部からオセアニアの島世界に住む人びとは、海の生き物の生態や行動を熟知し、さまざまな工夫を凝らした漁具を生み出してきた。漁具には、骨、貝殻、石、植物（葉・根・樹皮）など身近な素材が用いられた。いかにして海の生き物を漁具に誘導するかは、まさに知恵くらべである。砂地の穴に潜む大型のシャコを獲るため、あらかじめ準備したシャコの前鋏（まえばさ）をシャコのいそうな穴に差し入れ、侵入者を攻撃する習性を利用してシャコを釣り上げる。

釣り針は魚の口の大きさにより大小さまざままで、ポリネシアには長さ三〇センチメートルの巨大な木製釣り針がある。軸の部分に小魚をしばり、サメを釣る。一方、小型のメアジやカワハギをねらう釣り針は長さ一センチメートル程度である。ポリネシアでは、釣りの名手の死後、その骨を釣り針に使うとよく魚が獲れるとされた。釣り名人の遺体は盗掘されないような場所にこっそりと埋葬されたようだ。 罟から垂らした糸にクモの巣やサメ皮を餌

としてつけ、鋭い口吻をもつ体長一メートルものダツを獲る凧揚げ漁がある。凧の材料となる葉はパンノキ、サゴヤシ、着生シダ植物など多様である。サゴヤシの葉を使う凧は入念な細工を施したものである。 多様な釣り具

トビウオ釣り用の浮きで、海の霊をあらわす。糸のさきのゴージにココヤシの果肉を餌としてつける（ソロモン諸島、サンタ・アナ島、H0124948）



上：サゴヤシの葉製凧
下：凧揚げ漁。クモの巣を餌としてダツを釣る（ソロモン諸島、マライタ島、1975年）

木彫の浮きは海の霊をあらわした芸術品でもある。トビウオが餌に食いつくと、浮きの動きを見てすぐさま漁具を回収する。ミクロネシア・マリアナ諸島や台湾東南部の島・蘭嶼では獲れたトビウオを餌として大型のマグロやサワラなどを釣る。 シンジュガイを加工

し軸として、「かかり」にタイマイの甲羅を取りつけた疑似餌針は釣り具自体が魚に見えるようにしたものだ。海中で魚は餌と思って食いつく。形が流線形で光沢があり、とてもきれいな海の芸術品といえる。

大型のタカラガイの殻を石にかぶせた疑似餌針はポリネシアのトンガでマカフェケ（タコ石）と称される。マカフェケはネズミを模したものである。トンガには、海で溺れかかったネズミをタコが頭に乗せ、無事陸地まで届けるという内容の説話がある。助かったネズミは恩返しするどころか、タコに罵声を浴びせ、尿を引っかけた。これに激怒したタコは海でネズミを見たら、飛びついてこらしめるようになった。マカフェケを海中で上下に振ると、ネズミと思ったタコが食らいつくという。



海のアート
ほかに、大小のタカラガイは網

マカフェケ。「タコ石」の意味で、ネズミをあらわすトンガの釣り具（撮影：藤原一徳、H0186212）

の沈子とされ、網全体が海のクラフトと映る。木製の精巧な作りの笠は、海中で海の豪邸と魚に見えはしないか。魚伏籠は上から手を差し入れ、魚を手探りで獲る漁具で、工芸品の品格がある。 ココヤシ殻やマンボウガイ製の漁具を海中で動かして音を立て、サメを誘引してわなで獲る漁法がある。メラネシア・ソロモン諸島マライタ島のイルカ漁では、船べりを石で叩いてイルカを威嚇する。 円形のすくい網はミクロネシア・カロリン

諸島でローと称され、形の類似から天空のかんむり座をも指す。マライタ島の半月形すくい網モゲには大小二種類ある。小型のモゲは追込網で丸く困んだ網のなかを泳ぐメアジの群れを網の外から獲るためのもので、金魚すくいの風情がある。大型のモゲはふたつ両手にもち、引き潮で深みに移動する魚を獲るためのもので、昆虫採集の趣がある。 島世界の多様な種類の漁具には機能美を併せもつものが意外と多く、潮の香りとともに南海の景観を醸成してきたことがわかる。



上：シンプルなカヌーとココヤシ殻製の漁具でサメ釣り漁をする男性（撮影：門田修、ソロモン諸島、オワリキ島、2012年）
右下：サンゴ礁に仕掛けた笠に入る魚を獲る（インドネシア、カハキタン島、1995年）
左下：浅瀬に追い込んだ魚を半月形のモゲですくいとる（マライタ島、1975年）

貝製品が語る沖縄先史人と海

藤田 祐樹 ふじた まさき 国立科学博物館研究主幹



旧石器時代の貝製釣り針や貝製ビーズが発見された沖縄のサキタリ洞遺跡(2014年)

旧石器時代の遺跡を調査していると、現代の道具とよく似た遺物を見いだすことがある。数万年前の石斧や縫い針は、素材こそ違いますが、現代のそれらと基本的に同じ形をしている。こうした技術は、旧石器時代にすでに完成されていたととらえることができるが、そのなかに、わたしたちが魚釣りに使う釣り針もある。琉球列島の沖縄島や東南アジアのティモール島で発見された世界最古の貝製釣り針は、二万三〇〇〇年前までさかのぼる(三頁下の写真を参照)。真珠層の発達するニシキウズガイ科の円錐形の巻貝を材料とし、その平らな底部を削って磨いて作ったこれらの釣り針は、全体が湾曲して先端が尖っており、現代の金属製釣り針と同じ形をしている。

この釣り針が魚の口のなかに入り、引っかかることで魚を釣るのである。釣り針のサイズや形は、魚の大きさや口の形、餌の食べ方



旧石器時代の骨製縫い針(レプリカ)
(所蔵:国立科学博物館)

釣り針の材料となるニシキウズガイ科のギンタカハマ(左)とサラサバテイ(右)

るための努力を重ねていたことを、わたしたちに教えてくれる。

貝製ビーズと旧石器人のこだわり

旧石器人たちは、貝で釣り針だけでなく、ビーズを作って身を飾ることもあった。小さな巻貝に穴をあけたビーズは世界各地で発見され、古いものではアフリカや西アジアで発見された一〇万〜七万年前のものがある。日本では沖縄のサキタリ洞遺跡の二万三〇〇〇〜二万



サキタリ洞遺跡出土の旧石器時代の貝製ビーズ(提供:沖縄県立博物館・美術館)

年前の貝製ビーズがもつとも古く、二枚貝や巻貝、ツノガイとさまざまな貝が使われていた。このうち、小さな二枚貝のビーズは、シマワスレという種で作られている。半透明で淡い桃色を帯びた美しい貝だ。現代の沖縄ではほとんど見かけないが、沖縄島中部の海岸には、数多の多様な小型貝に交ざって落ちていた。旧石器人が二万年前にシマワスレを探したときにも、おそらく海岸には他の貝殻がたくさん落ちていただろう。そのなかには、黄色やオレンジ色、紫色の美しい貝もあったはずだ。しかし、旧石器人なりの好みやこだわりがあったのか、彼らはシマワスレを好んでビーズにした。

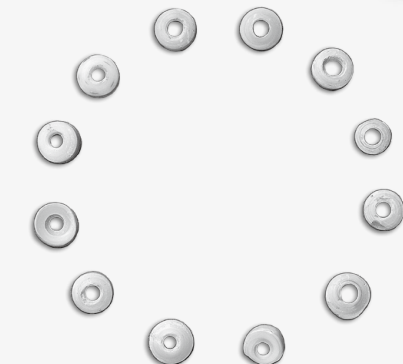
伊江島(いえじま)貝志原(くしはる)貝塚から出土したヤコウガイ製匙
(所蔵:沖縄県立埋蔵文化財センター)



貝志川島(くしかわじま)岩立(しいだち)遺跡西区から出土した縄文時代のイモガイ透かし彫り製品
(所蔵:沖縄県立埋蔵文化財センター)

多様化する海とのつながり

時代が下って縄文時代(貝塚時代)になると、琉球列島では貝製ビーズや釣り針の他にも、獣形に加工した貝製品、穴をあけたサメ歯、ジュゴンの骨を彫刻した製品(蝶形骨器)など、海の生物を素材とした多様な製品が作られるようになる。貝鏃やヤコウガイの匙のように実用的なものもあれば、透かし彫りを施したイモガイのように装飾または儀式的な用途と思われる物も含まれている。貝製ビーズや有孔貝製品は、埋葬墓から出土することも多く、特別な意味があったようである。もちろん貝塚からは海の魚や貝を食用としていた証拠も、旧石器時代以上に顕著に認められる。文化的に連続しているかどうかはわからないが、琉球列島の先史人たちは、旧石器時代に完成された釣り針やビーズに加え、さまざまな貝器や骨器を発展させ、海と深くかかわって暮らし続けていたらしい。



沖縄島の武芸洞(ぶげいどう)遺跡の埋葬墓から出土した縄文時代の貝製ビーズ
(提供:沖縄県立博物館・美術館)

ヤクの脱脂乳に湯と酸乳を加え加熱。チヨゴが浮いてくる(ブータン、ティンブー県、2013年)



高緯度ないし高地の冷涼な気候のところを
除き、乳はまず加熱して殺菌してから酸

回転攪拌



ナカイになるが、腐敗しやすい乳を常温でもある程度保存がきくバターやチーズに加工する技術は牧畜文化にとって不可欠であった。ここでは乳ないし乳を乳酸発酵させた酸乳を攪拌しバターを作る道具(英語でチャーン)を見てみたい。

A バター作り用具(タジク、ウズベク、H0106167、H0106168)

上下攪拌

ブータンでは革袋以外にも木桶や木筒に酸乳を入れ、「湯かき棒」のような攪拌棒を上下に動かす方法でもバターを作る。それ

チーズになる。紐を通されたチヨゴは、ブータンのテントのなかにつり下げられ展示されている。揺動攪拌は攪拌棒を用いるより時間を要す。だが、革袋は小さく折りたためる利点があり移動性の高い牧畜民のあいだで用いられてきた。他にもヒツジやヤギの革袋を地面や膝の上で揺るところや、エジプトや西アジアでは革袋を三脚につり下げて揺るところもある。革袋の代わりにヒョウタン容器が使われるのがアフリカだ。つり下げたヒョウタンを揺すったり、手にもって振ったり、膝の上に打ちおろしたりして酸乳を攪拌する。

みんぱく回遊

乳を攪拌してバターを作る

南真木人
民博超域フィールド科学研究部



B バター作り用桶、攪拌棒(ブータン、H0115907、H0115908)

中央・北アジア展示「中央アジア」

南アジア展示「生態となりわい」

B バター作り用皮袋(ブータン、H0275892)



中国地域の文化展示「生業」

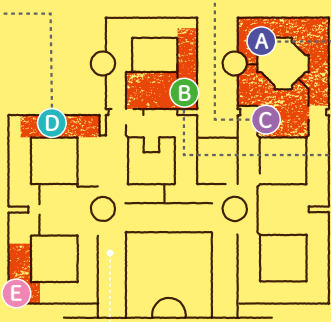
C バター茶作り用桶(チベット、H0105802)



B バター作り用攪拌器(ネパール、H0000451、H0000452)

西アジア展示「砂漠の暮らし」

D バター作り用具(エジプト、H0209370、H0209384)



観覧券売場
本館展示場

揺動攪拌

ブータンのヤク飼いはウシ皮の革袋に酸乳を入れ、へその部分に付けられたハンドルをもつて揺すりバターを得る。冷涼なブータンやチベットでは、ギーに加工せず、バターのまま小さな革袋に入れて保管する。残った脱脂乳をとろ火で加熱すると、タンパク質が凝固して真っ白の固形物が浮いてくる。これを綿布で漉し、角餅大に切った困炉裏の上で乾燥させたのがチヨゴという

はバター茶とよばれる、乳とバター入りの塩味の茶を木筒で作るやり方と共通する。バターは乳を静置したときに浮いてくるクリームからも容易に作る事ができる。ネパール高地では酸乳の回転攪拌と並行して、加熱殺菌後の乳を冷ます段階でクリームを集め、茶用木筒を用いた上下攪拌によってのもの一〇分でバターを作っていた。上下攪拌は、ルーマニアなどのヨーロッパやトルコなどにも広く分布し、トルコの牧畜民は木桶ではなくヤギの革袋をテントの支柱につるし立てて攪拌容器とする。

酸乳をさまざまなチャーンを用いて攪拌しバターを作り、その残りの脱脂乳を加熱してチーズを作る技術は基本的で、かなり普遍的なものだといえる。特にバターやバターオイルは最終加工品として確立した普遍性をもつ。乳文化があるところでは「乳を食べる」と表現するところが少なくないのは、人類史において液体の乳は固体の乳製品に加工して食べられてきたからである。

E ヨーロッパ展示場「酪農」コーナー



特別展

「Homologuens」にやぶる
——「ふたつの不思議な科学者」——

会期 11月23日(水・祝)まで
会場 特別展示室

◆関連イベント

連続講座 StreamX 超学校
みんなく×ナレッジキャピタル

「トバとくまのうしろ」シリーズ

第3回

身体の違いと「トバ」の多様性編

日時 10月7日(金)19時～20時

講師 中島武史(兵庫教育大学講師)

第4回

英語学習の脳科学編

日時 11月4日(金)19時～20時

講師 尾島司郎(横浜国立大学教授)

参加形式

ナレッジキャピタルYouTuberアカウン

トからオンラインライブ配信で視聴

※申込不要、参加無料

※アーカイブ配信あり

※詳細は本館ホームページをご覧ください。

※手話通訳あり

※事前申込制、先着順、参加無料

※オンライン(ライブ配信)でもご参

加いただけます。

特別研究関連シンポジウム

日本万国博覧会記念公園

シンポジウム2022

「人類よ、どこへ行く?」

「ポスト」コロナの世界を「つ」

本館特別研究「コロナ禍に対するロー

カルな対処としての「文化の免疫系」

に関する比較研究」関連シンポジウム

です。各分野の第一線で活躍する研

究者が議論を交わし、「コロナ禍以降

の世界像を描きます。

日時 10月29日(土)13時30分～

16時30分(13時開場)

会場 みんなくインテリジェント

ホール(講堂)(定員200名)

登壇者 斎藤環(筑波大学教授)

朝野和典(大阪健康安全基盤

研究所理事長、大阪大学名

誉教授)

山中由里子(本館 教授)

中島隆博(東京大学東洋文化

研究所 教授)

吉田憲司(本館 館長)

進行 島村一平(本館 准教授)

主催 国立民族学博物館

共催 大阪府

公益財団法人千里文化財団

※事前申込制、先着順、参加無料(要

展示観覧券)

※オンライン(ライブ配信)あり。申

重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によって
は、催し物の予定を変更・中止する場合があります。
事前に本館ホームページでご確認
ください。

イベント予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内

https://www.minpaku.ac.jp/event



主催 一般社団法人ナレッジキャピタル
国立民族学博物館

みんなく映画会

「たき火」

日時 11月3日(木・祝)13時～16時

25分(12時30分開場)

会場 みんなくインテリジェントホー

ル(講堂)(定員200名)

総司会 菊澤律子(本館 教授)

司会 相良啓子(本館 特任助教)

解説 大館信広(映画監督)

尾中友哉(NPO法人 Silent

Voice 代表)

千々岩恵子(映像制作者)

※事前申込制(代表者を含む2名ま

で)、先着順、参加無料(要展示観

覧券)

※事前申込の方へ入場整理券を当日

11時から本館2階会場入口にて配

布します。

※受付期間中に定員に満たない場合

のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】

■一般受付

10月3日(月)～28日(金)

※友の会電話先行受付は終了しました。
ワークショップ
複言語・複文化脱出ゲーム 中国語編
「本の世界からの脱出」
日時 10月29日(土)、11月12日(土)
会場 本館第5セミナー室ほか
※事前申込制(先着順)、参加無料
※お申込みはこちら
(大阪大谷大学
https://forms.gle/
2StwJ4eRtLGD
H08)



ワークショップ&ワークショップ展示
「レゴブロックを使ったプログ
ラミング言語ワークショップ」
「プログラミング体験からこ
ぼの伝え方を学ぼう」
日時 10月16日(日)、11月6日(日)
会場 本館第5セミナー室
※申込不要(当日先着順)、参加無料
企画・実施

一般公開・参加型シンポジウム
「生物とつづのヒトと「トバ」」
日時 10月9日(日)13時～16時
(12時30分受付開始)

会場 みんなくインテリジェントホール
(講堂)(定員200名)
講師 久保谷亮(精神科医)
久保田直行(東京都立大学 教授)
齋藤陽道(写真家)
土佐信道(明和電機 代表取締役
社長)

司会 菊澤律子(本館 教授)
※要事前申込(先着200名)、参加
無料(要特別展示観覧券)

企画・協力

10月30日(日)14時30分～15時15分
「世界を見せる」から
「世界観に触れる」へ
——誰のための点字考案200周年なの
か——
話者 広瀬浩二郎(本館 准教授)
※手話通訳あり

10月23日(日)14時30分～15時15分
いざ、ウルドゥー語入門
(せめて文字だけは編)
話者 吉岡乾(本館 准教授)
※手話通訳あり

10月2日(日)14時30分～15時15分
漁具にみるヒトと海の生き物
話者 秋道智彌(本館 名誉教授)
小野林太郎(本館 准教授)

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)

※定員200名

※事前申込制(先着順)、参加無料
・当日参加受付あり(定員40名)

第526回

10月15日(土)13時30分～15時(13時開場)

アートと学問のジャムセッション

講師 菊澤律子(本館 教授)

川瀬慈(本館 准教授)

山城大督(Twelve Inc.、京都芸術大
学 専任講師)

【申込期間】

■一般受付

10月12日(水)まで

※友の会電話先行受付は終了しました。

第527回

お問い合わせ

国立民族学博物館 広報・IR係

電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401

お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>



友の会

お申込みは友の会ホームページ内の受付
フォームをご利用ください。

友の会講演会

参加形式

①本館第5セミナー室(定員96名)

②オンライン

会員：無料

一般：500円(会場参加のみ)

※オンライン聴講ならびに会員以外の方の
ご参加には事前申込が必要です。

第530回 11月5日(土)13時30分～15時

【企画展「海のくらしアート展——モノからみる
東南アジアとオセアニア」関連】

カヌーとくらし

——海に生きるオセアニアの人びと

講師 須藤健一(堺市博物館 館長、本館
名誉教授)

オセアニアの島じまにくらす人びとは、わた
したちと同じアジア系の人類集団です。「太
陽の出る東方に生命の源と新しい島がある」
と信じて大海原を航海したといわれています。
その大航海の足は大型のダブル・カヌー。
今でも、島じまの往来や魚とりにカヌーは必
需品です。カヌーをつくり、海を生活の場に
してきた島人の生き方を考えてみましょう。

東京講演会

第130回 10月23日(日)13時30分～15時

【企画展「海のくらしアート展——モノからみる
東南アジアとオセアニア」関連】

島世界に進出したサピエンスと

海のあるくらし

講師 藤田祐樹
(国立科学博物館 研究主幹)

小野林太郎(本館 准教授)

会場 モンベル御徒町店4階サロン
(定員40名・要事前申込)

参加費 会員・モンベルクラブ会員：無料
一般：500円

協賛 株式会社モンベル

アプリカで誕生したわたしたちホモ・サピエ
ンスは、やがてアジアやオセアニアの島世
界へも進出しました。島への移住には海を越
えるだけの技術や、漁撈など海の利用が不
可欠です。この講演会では、島世界へと移
住したサピエンス集団の果たした海洋適応
の人類史について、東南アジアやオセア
ニア、琉球の事例から紹介します。

お問い合わせ

国立民族学博物館友の会 (公益財団法人千里文化財団)

電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp



大絵馬を修復する

日高 真吾
民博人類基礎理論研究部



文化財を修復してみました

縦二〇六センチメートル、横四二二センチメートルの巨大な大絵馬。滋賀県蒲生郡日野町に所在する馬見岡綿向神社の境内にある絵馬殿に掲げられている「祭礼渡御絵馬」である。平成二九（二〇一七）年に滋賀県指定有形民俗文化財に指定されたこの絵馬は、経年による顔料の剝離、剝落が著しく、画面の消失が懸念されたことから、令和元（二〇一九）年度から令和二（二〇二〇）年度にかけて民博で修復作業をおこなった。修復作業では、金具や顔料の科学分析、あるいは光学手法を用いた画面の調査を民博の共同利用型科学分析室が担当し、修復作業を合同会社文化創造巧芸がおこなった。

代の武将として有名な蒲生氏郷の祖父で、近江日野城（中野城）を築いた人物である。鎌倉時代から近江国南部を拠点としていた守護大名の六角氏の重臣として活躍し、六角氏滅亡の後には織田信長に仕えている。

絵馬の製作は、江戸時代、大庄屋であった中井源左衛門良祐が始め、その後、良祐の三男である中井正治右衛門武成の代になって完成した。絵馬を描いたのは、絵師の谷田輔長である。輔長は、近世の日野を代表する絵師高田啓輔の外孫で、現在伝わっている馬見岡綿向神社境内の整備にも携わっていた。加えて、日野の地誌としてまとめられた『蒲生旧趾考』の編纂を手がけた学者でもあった。

簡単に「祭礼渡御絵馬」にかかわる人物について紹介しよう。まず、大絵馬の主役である蒲生定秀は、戦国時



絵馬の光学調査(提供:文化創造巧芸, 2021年)

「祭礼渡御絵馬」は、まずその大きさに目を奪われるが、描かれた画面も興味深い。絵馬には、弘治三（一五五七）年に蒲生氏の総領であった蒲生定秀が再興したとされる春大祭（日野祭）の渡御行列の様子を推定復元したものが描かれている。画面の左下を先頭とし、行



絵馬の顔料を同定するための蛍光X線分析(2019年)

列をS字状に描きながら、右上を最後尾として配置している。人物の表情や衣装、持ち物、そして神輿や祭具などは細部にまで密に描かれ、輔長の絵師としての技量の高さを知ることがができる。また、絵馬の製作年は、蒲生氏が日野から離れて約二三〇年が過ぎた文化九（一八二二）年である。こうした年月からは、蒲生氏への畏敬の念を持ち続けた当時の日野の人びとの想いを感じることが出来る。そして、室町時代に定秀が再興した日野祭が理想形であると、一九世紀のこの時代までとらえられていたことがうかがえる。

保存活動への期待

絵馬の修復は、絵馬殿に奉懸されてから約二〇〇年を経て、初めて地上に

降ろす作業から始まった。その後、民博内に搬入し、光学調査や写真撮影、顔料や飾り金具の蛍光X線分析など、絵馬の製作技法に関する調査をおこなっ

た。そして、二年をかけて約二〇〇年分のホコリを除去し、顔料の剝落止めをおこなない、再び絵馬殿に掲げた。



修復後、絵馬殿に掲げられた「祭礼渡御絵馬」(2021年)

絵馬の裏面の調査から、彩色面となる板は三枚の杉板を合釘でつなぎ合わせたものであること、そこにケヤキの額縁が取り付けられていることを明らかにした。また、光学調査からは、絵馬に記述されていた墨書の情報や剝落止めの効果を確認できた。さらに蛍光X線分析では、彩色に使用された顔料を推定することができた。これらの成果は、馬見岡綿向神社より詳細な報告書が出されている。関心のある方は参照されたい。

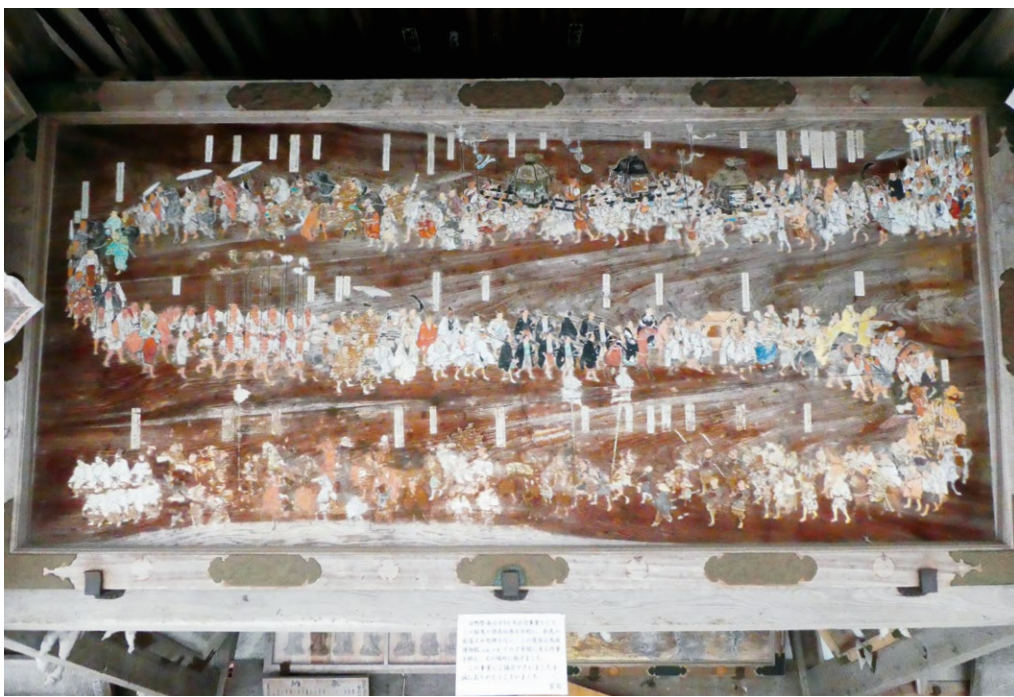
令和三（二〇二二）年三月。絵馬の修復を終え、無事に馬見岡綿向神社に返却した。このときはいまだに続いている



絵馬の再設置作業(提供:文化創造巧芸, 2021年)

新型コロナウイルス感染症の蔓延の真つみなかで、修復後の絵馬のお披露目となるはずであった五月の日野祭が中止され、今年も中止された。一方で、宮司さんや関係者の努力によって、日野町内で講演会などがおこなわれ、絵馬の修復事業について紹介がなされている。また、日野町の「町民会館わたむきホール虹」には、絵馬が描かれた製作当時の色使いなどを推定して作られた陶板の複製品が展示されている。

日野町のアイデンティティともいえる日野祭。この大祭を次の世代に伝えていきながら、日野祭の理想形を描いた「祭礼渡御絵馬」がこれからも日野町の人びとによって大切に継承され、機会あるごとに見ていただけたら、嬉し



絵馬に描かれた傘の下の蒲生定秀(提供:文化創造巧芸, 2021年)

国名	種類	点数
ミャンマー	糸操り人形芝居用の人形など	89点
タイ	大型影絵芝居、小型影絵芝居用の人形など	79点
カンボジア	大型影絵芝居、小型影絵芝居用の人形など	199点
ベトナム	水上人形芝居用の人形など	135点
マレーシア	影絵芝居用の人形など	220点
インドネシア	ジャワ島 影絵芝居、木偶人形芝居用の人形など	1,240点
	バリ島 影絵芝居用の人形など	

表：東南アジア影絵・人形コレクション
(2022年6月現在)



物語世界のキャラクター

—東南アジア影絵・人形コレクション

ふくおか しょうた
福岡 正太 民博 人類文明誌研究部



ティー・チアン一座によるカンボジアの大型影絵芝居スバエクトム
(カンボジア、シエムリアップ、2000年)

東南アジア影絵・人形コレクション

資料点数：1,962点
ミャンマー、タイ、カンボジア、ベトナム、マレーシア、インドネシアの人形芝居・影絵芝居に用いられる人形のコレクション。ひとつのコレクションとして収集したのではなく、各地域で収集を重ねるうち、東南アジアの人形芝居・影絵芝居を広くカバーするコレクションを形成するに至った。1975年～2013年受け入れ。
標本資料目録データベース<https://htq.minpaku.ac.jp/databases/mo/mocat.html>でこのコレクションを検索するには、「国名+人形」で検索する(ただし、芸能に用いない人形も含まれる)。



人形師ダダンに製作を依頼したワヤン・ゴレック。
1セットすべて東南アジア展示場に展示している
(H0229624ほか)

東南アジアにはさまざまな人形芝居や影絵芝居が伝えられている。みんぱくには、それらに用いられる人形のコレクションがある。標本資料目録データベース上では、少なくとも左上の表に示した地域の人形が確認できる。幕やランプ等の舞台装置、人形を作る道具、製作途中の人形などを含むコレクションもある。伴奏楽器と一緒に集められているものも少なくないが、この点数には含まれていない。また、芸能に用い

ワヤン・クリット・シラム

いくつかその由来を紹介しよう。マレーシアの影絵芝居ワヤン・クリット・シラムの一セットは、高名だった人形師オマルが使用していたと伝えられている。彼が亡くなった後、同じ師をもつ兄弟弟子であるハムザ・アワン・アマツトに譲られ、さらに研究者アミン・スウィーニーを介してみんぱくが収集することになった。二人の伝説的な人形師と研究者の手を経たこの資料は、ワヤン・クリット・シラムの歴史を知るうえでも重要である。現在東南アジア展示場で一点(ラーマヤーナの登場人物インドラジット)を見ることがができる。展示している残り八点は、

わたしが二〇〇七年に収集したものである。ちなみに、近年マレーシアではカラフルな影絵が好まれている。あらたに収集したものは光をよく通す塗料が使われているのが特徴で、二〇一九年に亡くなった人形師ユソフ・ビン・ママツトの手になる。

ワヤン・ゴレック
ジャワ島の木偶人形芝居ワヤン・ゴレックの一セットは、二〇〇三年

られない人形は含まれていない。

収集点数でみると、影絵芝居の人形がいちばん多く、大陸部のタイとカンボジア、マレー半島、ジャワ島とバリ島と、比較的広い範囲から集められている。大陸部では、影絵芝居の分布域を挟み込むように、ミャンマーの糸操り人形やベトナムの水上人形芝居の人形など、地域に特徴的な人形芝居があることもわかる。

これらのコレクションの特徴のひとつは、実際

に、日本ASEAN交流年の関連行事として、みんぱくにて開催した研究公演およびワークショップで実際に使用したものである。わたしは、インドネシア人研究者エンド・スアンダと相談し、当時二十代後半で新進気鋭の人形師だったダダン・スナンドール・スナルヤのグループを招き、使用した人形や楽器等一式をみんぱくで収集し、さらに、彼のグループの上演に加え、人形操作のデモンストレーションなどを映像で記録した。現在、東南アジア展示場で人形を、音楽展示場で楽器を展示し、ビデオテープでビデオを見ることがができる。

スバエクトム

カンボジアの大型影絵芝居スバエクトムは、カンボジア人研究者サムアン・サムの協力でおこなったカンボジア芸能の映像記録をきっかけとして収集したものである。内戦で多くのものが破壊されたカン

ボジアでは、技能の継承なども考慮し、あらたな人形の製作を依頼して、製作過程も映像に収めた。スバエクトムを研究し、その復興を支援している福富友子の尽力で、何年かにかけて一四七点の人



上：ベトナムの水上人形芝居ムアソイ・ヌオック
(撮影：鈴木道子、ハノイ、1995年)
下：人形師ユソフによるマレーシアの影絵芝居ワヤン・クリット・シラム(クランタン、2007年)

形を収集した。その間、一座のリーダー、ティー・チアンや人形の下絵を描いたナツプ・パウラのベテランの計報に接することになったが、上演も人形製作も次の世代に継承されている。一部を東南アジア展示場および音楽展示場で展示している。ウシの革製の影絵人形は、長期の展示により変形しやすいため、展示セットを三セット作り、一年ごとに展示替えをして資料を休ませている。

東南アジアの影絵・人形のコレクションには、詳しい由来のわからないセットもあるが、現地では多くの人々がこれらの人形を使った上演を楽しんだに違いない。それを思うと、人形を見ているだけで楽しい気分になってくるから不思議だ。



幸せの国のデイストピア、 北欧から望むユートピア。

トーキョー

宮前知佐子 民博人類基礎理論研究部

ユートピアかデイストピアか

「HARAJUKU」は、タイトルとは裏腹に、ノルウェーの首都オスロでストーリーは進む。ユーラシア大陸の反対側の理想郷だが、スクリーンには、我々のイメージとはかけ離れた光景が続く。シンゲルマザーの母と二人暮らしの主人公ヴィルデは、日本のポップカルチャーの影響を受け、アニメキャラのように真っ青な髪と原宿風ファッションで武装する。北欧の冬はモノクロで、クリスマス前の非日常感が浮き彫りにする「孤独と絶望」。楽園の住人たちは、たいそう不幸だ。ヴィルデに至っては、幸せからは遠いとされる日本を憧憬している。では、日本を羨望する若者はめずらしいのかというと、そうでもない。二〇二二年六月現在、世間を賑わしているのは、「世界一のYouTuber」を賑わしているのは、「世界一のYouTuber」ピーディパイ (PewDiePie)、東京へ移住」というニュースだ。ピーディパイは、ノルウェーのお隣りスウェーデン出身で、縁もゆかりもない日本移住に向け、数年がかりで準備した。スウェーデンも理想郷のひとつだが、向こう側からは、日本こそユートピアに映るらしい。ユーラシア大陸を隔てて見えるトーキョーは、我々の知る東京ではなさそうだ。

交錯するイメージ

映画の見どころのひとつは、ヴィルデの心情をあらわす幻想的なアニメーションだ。ハイテクと伝統に彩られ、すべてを呑み込み融合し続ける街。カラフルな文化に溢れたトーキョーの虚像が、冷たい現実と交錯するよう織り込まれる。このカットこそ、「ノルウェーの若者がイメージする日本」だと監督は言い、このことばで締めた。「HARAJUKU」では、自殺や、社会的弱者の売春という、大変センシティブなテーマに挑んだ。日本の方にも揺さぶりをかけられる映画であることを願う。完璧な社会は存在しない。わたしたちから見た日本は、日本から見た北欧である。

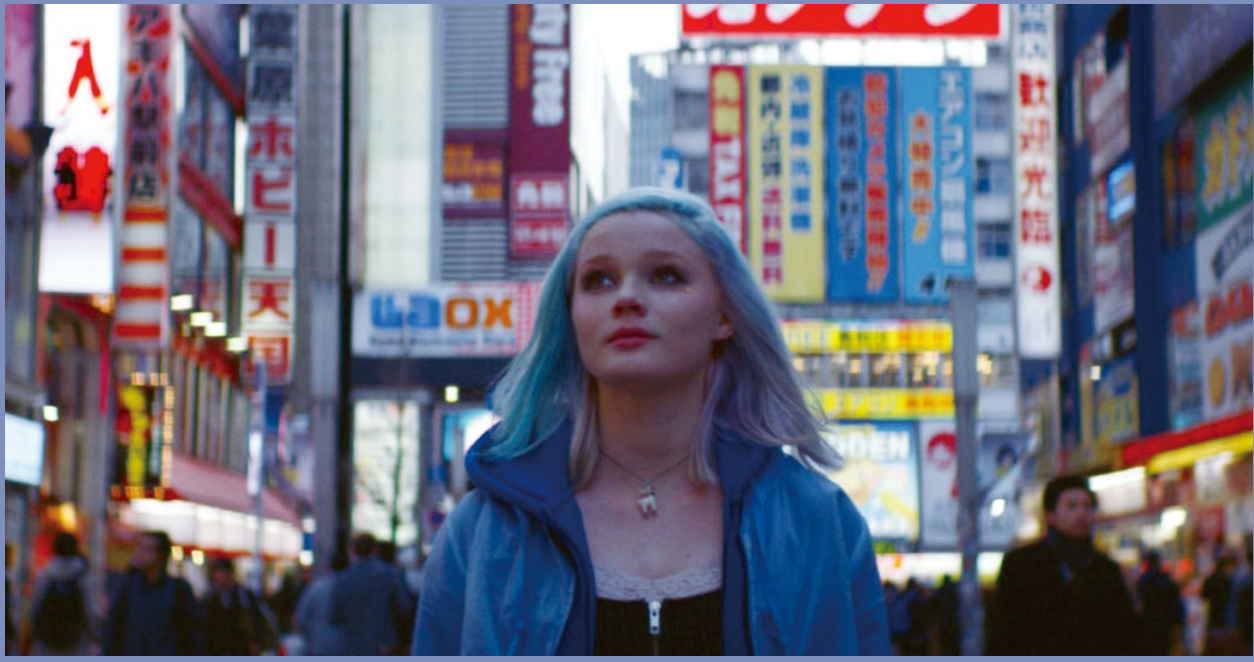
ヴィルデはユートピアを見出せたのか——。映画のなかで、行く末を見届けていたがきたい。そして、虚像ではない異文化に興味を持たれた方は、日本でのカルチャーギャップを綴るサイト、[psi://www.huskylovesjapan.com](http://psi/www.huskylovesjapan.com)を覗いてみて欲しい。おとぎの国ノルウェーから不思議の国ニッポンへ渡った、もうひとりのヴィルデのストーリーがそこにある。ユートピアは存在するのか、もう一歩、新たな世界を切り拓きたいならば、みんなの扉を叩くのも良い。世界各地から集められた真理の断片に触れられるだろう。

左：オスロと東京のスカイラインが交錯するポスター。HARAJUKUのタイトルのなかに「原宿」の文字が潜む © Maipo Film, 2018
下：外国人のファインダー越しの東京。見慣れた日常がどこか違う風景に © Husky Loves Japan, 2019~2020



「HARAJUKU」

原題：HARAJUKU
2018年／ノルウェー／ノルウェー語／83分／DVDなし
監督：エイリク・スヴェンソン
出演：イネス・ホイセーテル・アーセルソン、ニコライ・クレーヴェ・ブロック、イングリ・オラヴァほか



東京の雑路にたたずむヴィルデ。HVEM ER DER FOR DEG? = 誰があなたのそばに? © Maipo Film, 2018

おとぎの国の社会問題

北欧という「おとぎの国」にさえ、青い鳥は存在しないのか。ヴィルデの青い髪に、メーテルリンクの童話が重なる。己の頭上は肉眼では確かめられない。そこにある幸せを掴めず、逃避を計るヴィルデ。

エイリク監督にお話を伺う機会を得た筆者は、日本人としての驚きを率直に伝えてみたところ、監督は、次のように応えてくれた。

「たしかに、ノルウェーが実現した社会は高く評価されているだろう。でも、他と同様、複雑な家庭環境やメンタルヘルスによる多くの問題は存在する。HARAJUKUを撮影する数年前、オスロ中央駅に屯するティーンの実態を調査していた。そこで実の父に初めて会うという子に出会った」

ヴィルデは実在する！ 監督は、「ヴィルデと実父が出会う場面が映画のコア」なのだを教えてくれ、こう続けた。

「私は、父がソーシャルワーカーだったので、ティーンの見点だけではなく、さまざまな角度から、社会問題を見つめられた。ヴィルデは、こうした環境を反映した、代表的なティーン姿といえる」

おフランス語とわたし

まつもと あやこ
松本 文子

民博 機関研究員

わたしは、フランス語が好きだ。フランス語の仕事をしていた両親が、哲学者のモンテーニュからモン^つの音をいただき、文子と名付けられたからだ。ちなみに綴りが近いモンターニュだと「山」。フランス人に説明するとき、山子だと思われたりする。

フランス語を使う地域は世界にさまざまあれど、わたしにとってはフランス語＝おしゃれなパリ、のイメージなのである。子どものころ、親の仕事でパリのホテルに滞在したときに、受付で鍵を受け取る役目を仰せつかり、部屋番号は203だったか、「ドウ、ソン、トロワ、シルブプレ」と言ってムッシューにほめられた際には、パリに受け入れられた気がしてゾクゾクしたのだった。

時は過ぎ、大学生になったわたしは、人気ドラマ「ビバリーヒルズ青春白書」に齧^{かじ}り付くなどアメリカナイズもされつつ、第二外国語のフランス語が「フラ語」と俗っぽく呼ばれるようになって、フランス語＝パリに対する憧れはやまず、意気込んで交換留学の申請をした。がしかし、農学部だったこともあり、留学先にはパリの大学はないとのことその思いは撃沈する。フランス語を使いたいなら、スイスやカナダもある、と勧められたけれど、パリじゃないならもうどこも一緒だと、半ばやけくそでいちばんネタになりそうな(?)、ベルギーのルーバンカトリック大学を選んだ。

かくして、憧れのフランス語漬けの留学生活が始まったが、農学部には交換留学生用のカリキュラムなどまったくなく、普通の2年生に放り込まれる。経済学部や文学部には留学生があふれて

キャッキャしている。それを横目に見ながら、農学部初の日本人留学生として、フランス語で数学や生物学の講義を受け、辞書にも載っていないミドリムシ、のどき専門用語の数々を覚えることになる。わたしが憧れたフランス語はこれだったの……?

当時最新だったお弁当箱サイズの電子辞書を、ウィンウィン言わせながら使っていたわたしに、シャイな農学部生たちは引いていたが、唯一タリア系カナダ育ちの女子が、興味をもって近づいて来てくれた。農学部でできた友達に彼女だけだ。そう、ベルギー南部のワロン地域は田園的なのだ。北部のフランドル地方に住むフラマン人はゲルマン民族でフラマン語(ベルギーのオランダ語諸方言)を話す。ファッションで名高いアントウェルペンなど有名都市はフラマン語地域に多い。南から北に向かう電車に乗ると、ブリュッセルから急に車内放送がフラマン語になるのが不思議だった。

留学中何度もパリに脱走したが、ベルギーに戻るときに、鉄道の窓口でフランス語を修正される。ベルギー方言があるのだ。フランス語は60がスワサント(soixante)で10がディス(dix)、70は60+10でスワサントディス(soixante-dix)、という恐ろしく複雑な数え方をする。一方ベルギー方言は、7がセツト(sept)なので70はセタント(septante)、とシンプルだ。でも、窓口で「セタント」などと言うものなら、受付嬢が「田舎者ね」と言うかのごとく、「スワサントディス?」と言い直す。

そんなこんなで、現実のおフランス語体験はちょっと苦かった。それでも幼心に焼き付いた憧れは永遠にやまない。

『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

月刊みんぱく 2022年10月号

第46巻第10号通巻第541号 2022年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 中川理 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2022年
10月号

編集後記

本号特集では企画展「海のくらしアート展——モノからみる東南アジアとオセアニア」から海に暮らす人びとの生活具や技術などが紹介される。漁具などをその美しさから「アート」として展示するという。漁具をアートととらえるのは一般的ではないが、日常の生活具に美しさを見出だすのは、暮らしのなかから生まれる美の世界を追求した柳宗悦の思想に通じるのであろう。

人類は太古から地球上を移動してきた。陸を越え、海を渡り、はるか彼方まで移動した。移動するときは、大事なものを携えていったことだろう。交易では、貴重なものが交換されたにちがいない。移動にともなって、習慣や文化が伝播した。人が動くことによって技術も移動した。そういった移動の軌跡を生活具からたどるのは、遠い場所とはるかむかしへの口マンをかきたてられる。海を渡り、海に暮らした人びとの移動の軌跡を発見しに展示を見てみたい。

(三島禎子)

次号の予告 11月号

特集「古今エジプトのイメージ」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

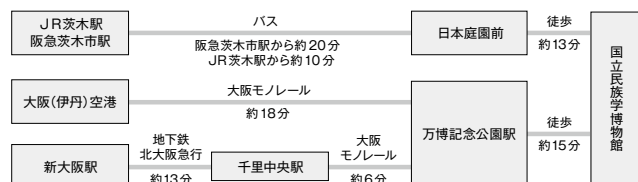
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>



日本万国博覧会記念公園シンポジウム 2022

人類よ、どこへ行く？ Quo vadis, homini? ポストコロナの世界を占う

新型コロナウイルス感染症はまたたく間にグローバルに広がり、いまま人類社会に甚大な影響を及ぼしています。社会に潜在していたさまざまな差別意識や矛盾が顕在化するなか、人類が近代に入って作りあげてきた制度や規範の意義と存在理由が、改めて問われています。万博記念公園と国立民族学博物館が協働しておこなうシンポジウムの2年目にあたる本企画では、精神医療、医療、比較文学比較文化、哲学など、各分野の第一線で活躍する研究者が議論を交わし、コロナ禍以降の世界像を描きます。

プログラム

- 第1部 コロナ禍のなかを生きる
- 第2部 コロナ禍の意味するもの
- パネルディスカッション

登壇者

- 齋藤 環(筑波大学教授)
- 朝野 和典(大阪健康安全基盤研究所理事長、大阪大学名誉教授)
- 山中 由里子(国立民族学博物館教授)
- 中島 隆博(東京大学東洋文化研究所教授)
- 吉田 憲司(国立民族学博物館長)
- 島村 一平(国立民族学博物館准教授)

定員200名、要事前申込、参加無料(要展示観覧券もしくは友の会会員証)
 オンライン(ライブ配信)あり。当日、みんぼくホームページより無料でご視聴いただけます。
 詳細・受付フォーム: https://www.minpaku.ac.jp/ai1ec_event/36867
 ※受付期間 10月21日(金)まで
 【お問い合わせ】 公益財団法人千里文化財団 TEL: 06-6877-8893(土日を除く9:00-17:00)



【日時】
2022年10月29日(土)
13時30分～16時30分(13時開場)

【場所】
国立民族学博物館
みんぼくインテリジェントホール(講堂)

主催: 国立民族学博物館 共催: 大阪府、公益財団法人千里文化財団 協力: 国立大学法人大阪大学、大阪モノレール株式会社、公益財団法人大阪日本民芸館、公益財団法人関西・大阪21世紀協会、万博記念公園マネジメント・パートナーズ 後援: 公益社団法人2025年日本国際博覧会協会



2023年国立民族学博物館オリジナルカレンダー

海のくらしアート

東南アジアとオセアニアの漁具・舟具・儀礼用具

2023年の国立民族学博物館オリジナルカレンダーは、企画展「海のくらしアート展——モノからみる東南アジアとオセアニア」の展示資料から選びました。海のくらしから生まれたモノの魅力を一年をとってお楽しみください。

企画展「海のくらしアート展 ——モノからみる東南アジアとオセアニア」

会期: 2022年9月8日(木)～12月13日(火)
場所: 本館企画展示場



定価 1,430円(税込)

国立民族学博物館友の会 会員価格 1,287円(税込)

サイズ 25cm×25cm (開くとタテ50cm×ヨコ25cm)
 オールカラー 28頁中綴じ

- ◆5冊以上まとめてご購入の場合は、1冊1,144円(税込)です。
- ◆通信販売の場合、別途発送手数料が必要です。

お問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ E-mail shop@senri-f.or.jp 10:00～17:00 水曜日定休
 オンラインショップ「World Wide Bazaar」 <https://www.senri-f.or.jp/shop/>



オンラインショップ